

批評と紹介

アーヴィンド・シャルマ編
マハーバーラタ論集

原 實

東
洋
学
報

古代インドの叙事詩 Mahābhārata (以下 MBh と略称する) に関しては、昨今インドから幾つかの論文集が公刊されている (*The Mahābhārata Revisited*, ed., by R.N. Dandekar, New Delhi 1990, *Moral Dilemmas in the Mahābhārata*, ed., by B.K. Matilal, Delhi 1989) が、ここに紹介するのはオランダの老書肆より、現 Lausanne 大学教授 Johannes Bronkhorst が監修する Brill's Indological Library の第一冊として刊行されたものである。因みにこの Series は現在すでに 9 冊の刊行を見、四人の編集委員の中には京都大学の御牧克己氏が参加し、最新刊のものは本邦の高橋孝信氏の *Tamil Love Poetry and Poetics* (1995) となっている。

本書は本文489頁よりなる大冊で、23篇の論稿より成り、巻末は短い索引で終わっている。この中、最初の10篇の論文は既に *The Journal of South Asian Literature* 20 (1985) に発表されたものの部分的修正増補を経ての再録であるが、残余の13は新規のものを集めている。大家の論文に混じってアメリカの若い学者による研究論文 (主にその Ph.D.論文の要約) もあり、文献学的研究から実態調査、社会学的研究に到り、量質必ずしも均質とは称し難いが、叙事詩を中心とした大部の論文集として研究者はこれを看過する事は出来ない。以下にそこに収録されている23の論文を順を追って紹介する。

(1) J. Dunham: *Manuscripts used in the Critical Edition of the MBh. : A Survey and Discussion.*

MBh.の批判版は1933-1966年の間に、V.S. Sukthankar を初めとする複数の編者によって公刊されたが、ここに各巻に用いられた写本は総合的且つ分析的に論じられた。著者は Śāraḍa, Nepālī, Maithilī, Bengālī, Devanāgarī, Telugu, Grantha, Malayālam の諸写本が、今一度それぞれの地域性に即して再検討されねばならないと言っている。

第
七
十
七
卷

三
四
六

(2) D.H.H. Ingalls: *The MBh: Stylistic Study, Computer Analysis and Concordance.*

令息と共に一代の碩学がMBh.の語法的文体的特徴を統計的に論じたものとして今後のこの種の研究に不可欠の指針となった。34-35頁に語られている様に、碩学は彼がこれまで叙事詩を幾度となく読む間に感知した事を、機器によって科学的に立証したから、その結果はただ単に機械的に編み出したものとは自ずからその趣を異にしている。Formulaにおける特定語句の局地化 (polarization) と凍結化 (freezing) 現象、更に戦闘記述、物語記述、説法記述に Metre, Word Break に際だった傾向が看取される事、又同じ戦闘記述にあっても巻毎 (6-7) に吟遊詩人の癖、特徴が見られるから、その意味で Vyāsa は文字どおり「編集者」であったとなす等は極めて興味深く、示唆に富む。

(3) B.S. Miller, *Karṇabhāra: The Trial of Karṇa.*

Bhāsa が MBh. に取材した一幕物の戯曲 Karṇabhāra の英訳で、訳者は古典インド抒情詩の翻訳家として知られていたが、不幸にして先年物故した。英訳に先立って短い序文が添付されている。

(4) E. Gerow, *Ūrubhaṅga: The Breaking of the Thighs.*

同じく Bhāsa の Ūrubhaṅga をインド詩学の大家が翻訳した。序文を欠くが英訳の後に註が付いている。

(5) M.C. Smith: *Epic Parthenogenesis.*

「父なし子」「母なし子」の物語、「処女懐胎」(Kuntī, etc.) 「童貞生殖」の類は MBh. に稀でなく、屢々それは「超人誕生」の motif となった (ayonija) が、著者はここで特に武士 (Kṛpa, Droṇa, Skanda) の例を取り上げる。西洋古典世界を視野にいたした超人誕生神話研究の一環として比較神話学に貢献する所があると思われる。

(6) A. Hildebeitel: *Two Kṛṣṇas, Three Kṛṣṇas, Four Kṛṣṇas, More Kṛṣṇas: Dark Interactions in the MBh.*

MBh. に直接的間接的に「黒」(kṛṣṇa, śyāma, sunila) の名で言及される Kṛṣṇa, Arjuna, Draupadī, Vyāsa, Abhimanyu を取り上げ、それらが共に現れる文脈を Draupadī and Kṛṣṇa と Kṛṣṇa, Arjuna and Draupadī の二項目の下に考慮する。

(7) K. Klostermaier: *The Original Dakṣa Saga.*

有名な Śiva による Dakṣa 祭式破壊物語を叙事詩と Purāṇa 文献より集め、7項目に分けて系統的に論ずる。この神話の背景に、もと Viṣṇu 教徒の霊場であった北インド Kanakhala tirtha が Śiva 教徒 (就中 Pāśupata?) によって占拠されたという歴史的事件が存在すると推定して

いる。

(8) R. Katz: *The Sauptika Episode in the Structure of the MBh.*

MBh.第10巻の成立に3層 (heroic, human, Hindu) を区別し、前2層に古い Kuru-Pañcāla (Dhr̥ṣṭadyumna, Śikhaṇḍin) の対立抗争を設定して、現在伝わっているものは Hindu 教徒 (就中 Pañcarātra) の手による re-shape の結果であろうと推定し、叙事詩成立史に興味深い視点を提供している。

(9) J.L. Fitzgerald: *India's Fifth Veda: The MBh's Presentation of Itself.*

MBh.第一巻に語られるその成立物語 (Vyāsa—梵天勸請—Vyāsa—Gaṇeśa—Vaiśampāyana—Ugraśravas) に言及しつつ、MBh.が梵天の承認するところ、Smṛti の権威を獲得し、婦女、Śūdra も対象とする教訓詩となった過程を説く。

(10) G.A. Tubb: *Śāntarasa in the MBh.*

後世の詩論家、修辞学者は MBh. を śānta rasa を基調とする教訓詩 (śāstra and kāvyā) と捉えているが、その問題を Dhvanyāloka その他に辿って訳すねて問題点を明快に論じた本論文集中の白眉の一、śānta-rasa 研究に重要な貢献と言える。この rasa の sthāyibhāva その他 (śama, tṛṣṇā-kṣaya-sukha) との微妙な連関とその指示性が arthaśaktimūla-saṃlakṣyakrama-dhvani (anuraṇana) である点を明示している。

(11) B.M. Sullivan: *The Epic's Two Grandfathers, Bhīṣma and Vyāsa.*

MBh.中に共に「祖父」(pitāmaha) の名で呼ばれる Vyāsa と Bhīṣma を構造論的に対比したもの。筆者が本誌前号に紹介したその著 Kṛṣṇa Dvaipāyana Vyāsa and MBh. 第四章と略同様の内容を有する。対比の主なものを挙げれば、Vyāsa: Bhīṣma, Satyavati(-Parāśara): Śantanu(-Gangā) (婚外息子), Brahmin: Kṣatriya, Yamunā: Gangā, dharma: mokṣa, pravṛtti: nivṛtti, 妻帯: 独身等である。但し、両者の神性 (Nārāyaṇa と Dyaus) には問題があるとし、前著における如く Vyāsa と梵天との類似を強調している。

(12) I.V. Peterson, *Arjuna's Combat with the Kirāta: Rasa and Bhakti in Bhāravi's Kirātārjunīya.*

MBh. 3. 13-42 (Kairāta-parvan) に取材した Bhāravi の Kirātārjunīya の文体論的研究。両者の出入り、文体を比較して Bhāravi の詩的洗練の跡を明示する。ここで弓矢を手にした武士 Arjuna は苦行者として登場し、最高神 Śiva と戦い、敗れて神に bhakti を籠め

で心服するから、これは *vīra* と *sānta* という二つの矛盾した *rasa* を含む。更に *vīra-rasa* と南インド固有の *bhakti* 思想が如何にして結び付くか、その事情を検索した。但し所謂 *bhakti-rasa* そのものを扱ったものではない。

(13) B.N. Sumitra Bai and R.J. Zydenbos: *The Jaina MBh.*

業と輪廻の教義を説き、*Yādava* と *Pāṇḍava* を第22代 *Tirthaṅkara Ariṣṭaneminātha* の信奉者として登場させる中世 Jaina 版 MBh. の系列 (Sanskrit, Prakrit, Apabhraṃśa) を *Jinasena* の *Harivaṃśa-purāṇa* を中心に解説し、MBh. との主要相違点を指摘する。後半は Kannada 語によって伝えられた Jaina MBh. (*Pampa*, *Ranna*, *Karṇapārya*, *Bandhuvārma*, etc.) の要領よき解説となっている。

(14) W. Sax: *Ritual and Performance in the Pāṇḍavalīlā of Garhwal.*

(23)に後説する中央 Himalaya (Garhwal) に残る *Pāṇḍavalīlā* の実態調査。MBh. の物語がどのように民俗芸能として現在なお生きているか、それらがどのように発達変容して地方の social event となったかを具体例で示し、役と役者が感応同交 (possession) して、それを祭祀 (ritual) 化した実態を解説している。

(15) D.L. Gitomer: *Rākṣasa Bhīma: Wolfbelly among Ogres and Brahmans in the Sanskrit MBh. and the Veṅīsaṃhāra.*

上述(12)と同様、MBh. に取材した古典梵文戯曲の研究。*Bhaṭṭa Nārāyaṇa* の *Veṅīsaṃhāra* は *Bhīma* と *Draupadī* を *nāyaka* と *nāyikā* としているが、それはもとより MBh. には見えない。その他の戯曲の独創 (*Bhānumatī* と血塗れた手による結髪)、*Bhīma* と羅刹との関係 (*Hiḍimbā* との結婚、羅刹退治)、彼自身の羅刹性等の問題が戯曲論を背景に論じられている。

(16) V. Akhujkar: *Sāvitrī: Old and New.*

インドにあって貞女の鑑 (*pativrata*) とされる *Sāvitrī* は通常の貞女のリスト五名 (*Ahalyā*, *Draupadī*, *Sitā*, *Tārā*, *Mandodari*) の中に数えられず、且つ後世の戯曲や物語文学に翻案を見ないのは何故であるか。それは彼女が通例の夫随伴 (*sahagamana*) という受動的貞女型でなく、勇気と知性を以って積極的に夫をその死から救い出すその「烈女性」にあるとなす。更に近代の翻案二種 (*Aurobindo* 1954, *K. Santhanam* 1963) を紹介している。

(17) M.M. Deshpande: *The Epic Context of the Bhagavadgītā.*

Gītā の冒頭にみえる *Arjuna* の戦意失墜は MBh. の先行部分 (MBh. 5) にも散見するから、MBh. 第六巻においても彼は未だ *Kṛṣṇa* の神性に半

信半疑であった筈である。Gitāの第4章より第11章（神体顕示）に到って Arjuna は Kṛṣṇa の神性を確信するに到る。従って MBh. は元来 Kṛṣṇa の神性を説くものではなかったが、Kṛṣṇa 教の確立後、その教徒は Gitā のみならず MBh. 全体をその影響下に収め、第六巻中に不自然な印象を残さぬまでに仕立て上げたと言う。結果的に1-3は古層、4-11は新層を成す事となるが、著者は MBh. が常に増広を経験して現形を取るに到った事を最後に強調している。

(18) V. Urubshurow and T.R. Singh: *The Battle of Kurukṣetra in Topological Transposition.*

Kurukṣetra 東方60マイルに位する Sahāvali 村の賤民 Bābā, 即ち今に残る吟遊詩人 (Singer of Tales, 同時に Shaman にして且つ熱烈な Viṣṇu 教徒 = bhakta) の実地踏査の研究。よって MBh. が今尚強靱な生命力を以て生き続けている事を強調する。

(19) B.M. Sinha: *Arthaśāstra Categories in the MBh: From Daṇḍanīti to Rājadharmā.*

Pali 仏典 (Nikāya, Jātaka) に見える転輪聖王 (Cakravartin) の法 (Dharma) による支配の称揚と khattivijjā, khattiyamāyā, khattidhamma の蔑視を中心に据え、後者と Arthaśāstra に説かれる Daṇḍanīti を対比させつつ仏典の王観を窺い、それと MBh. 12巻の Rājadharmā との連関を説く。

(20) Ch. Minkowski: *Snakes, Sattras and the MBh.*

Veda の Sarpasattra に論を起し、それと MBh. 冒頭に位する Sarpasattra を比較してその異同を論じ、傍ら古代インドの Snake-lore, 及び蛇と Kuru との関係、更に有名な Bhṛgu 問題に批判的に触れつつ、MBh. 全体における Sarpasattra の位置を明確にしている。

(21) B.K. Matilal: *Kṛṣṇa: In Defence of a Devious Divinity.*

MBh. の Kṛṣṇa は Pāṇḍava 軍の黒幕として姦計を指示し、不正の戦い (Bhīṣma, Droṇa, Karṇa, Duryodhana 戦) によって味方を勝利に導いた。神と崇められる者には凡そ不適切な行為であるが、にも拘らず彼が神とされるのは何故か。インドの神観、正義 (Dharma) の概念を西洋のそれと比較しつつ明らかにし、傍ら Droṇa の弱点 (Ekalavya) に言及する。

(22) A.K. Ramanujan: *Repetition in the MBh.*

愛と戦争、苦渋と歓喜、呪願と呪誓等、MBh. には大小様々な主題が繰り返され、変曲されて、重層的に織り成されて物語の全体は終局の破滅に向かっている。MBh. 形成の過程は結晶学 (crystallography) の結晶のそれを想起させるが、その有様を豊富な事例を引用して例示している。

(23) J. Leavitt: *Himalayan Variations on an Epic Theme*.

MBh. 1. 139-143, 3.13 に述べられる Bhīma と羅刹女 Hiḍimbā 物語の中央 Himalaya(Kumaoni) 版の実地調査的研究。両者を比較して後者における前者の fragmentation, localization, contemporization (=proximation) の過程を明示し、叙事詩がその現代地方版で強靱に生き続けている実態を明らかにしている。

以上の紹介によって明らかなように、本書は MBh. を巡ってその写本研究(1)、Computer による統計的分析(2)、後世戯曲(3,4,15)、欽定詩(12)、戯曲論(10,12)、仏典(19)との関係、個々の主題の成立史的研究(7,8,17,20,22)、貞女観(16)、神観(21)、実態調査報告(14,18,23)等を盛り、その内容は極めて多彩にして且つ豊富である。その中には幾つかの重要な研究論文があり、読者は夫々の関心に従って幅広く本書を利用する事が出来る。

Essays on the Mahābhārata, edited by Arvind Sharma, Brill's Indological Library, edited by Johannes Bronkhorst, volume I, E.J. Brill, Leiden, New York, København, Köln 1991. pp.i-vii+489.